

日曜日の朝は民放各局のニュースショーパン組を見るのが習慣になつていい。コイズミ状況劇場だけではない。大リーグで活躍する若者たち、そしてなにより、それらの活躍に快哉を叫びながらも自己撞着に陥っているマスメディアと我々日本人の姿がそこに見えるからである。「球界のご意見番」とかいう人物が現役選手たちの一拳手一投足に揚げ足を取りながら「渴アーツ」などと吠えている番組がある。「往年の名選手」たちがかび臭い俗物オヤジの御託を垂れ流している。それを毎週うんざりしながら、だけど興味をもつて眺めているのだ。

それは典型的な形で示された。『村』

社会での多数派による「己」を危うくするチャレンジャーや新時代を切り開く者へのイメージに見える。同時にそれは現代の日本とその中にあらゆる業界（むら）を支配してきたお山の大将たちやその取り巻きたちが、歴史の地殻変動に揺れる砂山の上でうろたえる姿でもあるのだ。

野茂選手のチャレンジと成功、そしてイチローと新庄を中心とする多数の日本人選手の大活躍によつて、大リーグはニュースの定番となつてゐるが、ほんの半年前のイチローや新庄の挑戦に対しても「ご意見番」たちは何を言つてきたのだろうか。

キャンプ中やオープントークに登場するイチローや新庄には「あれでは大リーグには通用しない」と言い、それでも活躍を続けると、今度は「大リーグの厳しいシーズンを通して活躍できるものだろうか？」と表現を変え、さらには「大リーグの力も落ちたものだ」などと負け惜しみ、そして、今では匙を投げたように「アッパレッ」などと自暴自棄になつて白旗を揚げている。

その言葉の裏にあるものは、日本プロ野球界に見切りをつけた選手に対する怨念と嫉妬である。彼らが挫折して居場所を守つて欲しいのだ。残念ながらそれは、一瞬であるとも自分を見つめた後輩たちの成功を祈る者の姿では

江刺の稻

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育つた稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せている。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

本誌編集長 昆吉則

ピエロと化す往年の名選手たち

ない。彼らがなぜ日本の野球界を見限つたのか、何時の間にか誇りなく死に至る安樂椅子に座り込んでいる己の姿を問わぬまま、見切りをつけた若者たちを逆恨みする者の老齢、あるいは寄生虫の自己主張のようなものなのである。

ラジオにかじりついて野球を聞いていた時代、アナウンサーが呼ぶその名前を憧れと共に聞いた人物。僕にとっての始めての野球観戦だった東映フライヤーズ対南海ホークス戦。薄暗いナイター設備の駒沢球場左翼席で、目の前に立つていただぶだぶのユニホーム姿に見とれ、家に帰つてもその独特的の仕草を真似たスマッガー。かつて憧れた名選手がメディアでピエロを演じ立つた姿に、僕は終戦を知らず南の島で命じられるがままひとり取り残されて戦い続け、現代の浦島太郎となつて日本に戻り、拳句はメディアと政治の玩具にされたあの下士官と同じ残念な姿に、僕は終戦を知ら

ない。しかし、農業の世界を典型として日本の社会や企業をリードしている人々の論理とは、それに憧れた時代の論理や精神を一步も出ていないのだ。とりわけ農業とその関連業界には、TV番組で名選手たちが演じているのと同じ精神構造を背景にしている人々が山ほどいるのである。そして、僕自身を含めて、人はあの往年の名選手と同じ役柄を演じてしまう性を持つてゐるのである。

手にした豊かさや彼らを満足させた小さな村内での名声を餌にチャレンジャーたちを押し留めようとしても、イチローや新庄は日本の野球界から示された破格と思われた契約金や安泰の地位には目もくれない。それは、彼らが異星人だからではなく、未来への挑戦に生きているからなのだ。そして、彼らが求めているものとはそれを取り組むことからしか与えられない「誇り」だからである。彼らは、老人たちがそれを手段として自らを励ました大リーグへの「劣等感」など持ち合わせていないのである。そして、未来を切り開く若者に与えられるべきものは、唯一、彼の「誇りを擁護すること」である。

人は銀シャリの丼飯に目の色を変えないのでだ。時代をリードする若者は村役場や中小企業の玄関に銅像を建てて貢う身分に出て世することを望んではいる。しかし、農業の世界を典型として日本社会や企業をリードしている人々の論理とは、それに憧れた時代の論理や精神を一步も出ていないのだ。

彼らは日本人の誰もが貧しかった時代の成功者であり、そこでの成功体験や大リーグに対する劣等感を土台にし